参考文献の書き方

大浦 真

最終更新日: 2009 年 12 月 22 日

1　参考文献とは

論文やレポートでは、その中で参考にした文献、引用した文献を明示する必要があります。それらが明示されていない場合、論文・レポートとして不完全であると評価されてしまいます。この節では、この参考文献の書き方について解説します。なお、学問分野によっては、参考文献ではなく、「参照文献」や「引用文献」と呼ぶこともありますが、この文書では、「参考文献」という呼び方で統一します。また、この文書では、本文で参考文献の名前を挙げて言及することを「参照」と呼び、著作権法上の要件に基づく形で他の文献の内容を自分の著作に持ち込むことを「引用」と呼びます。この辺りも学問分野によって、言い方が異なることがありますので、注意して下さい。

2　参考文献を明示する理由

そもそも参考文献を明示しなければならないのはなぜなのでしょう。

まず、論文でもレポートでも、私たちは、先人の研究、思考の上に乗って、それを記述しています。決して自分一人の考えだけで、論文・レポートを書いているのではありません。参考にした先人の研究に敬意を表するためにも、それを明示しなければなりません。

また、読者への便宜をはかるという意味もあります。他者の論文やレポートを読む場合、そこから進めて、その論の根拠としている論文もさらに読み進めることがあります。そのためにも、参考文献を明示する必要があります。さらに、誰が見ても、その文献にアクセスできるような形で書く必要があります。例えば、書籍についてそのタイトルと著者名を書いただけだと、その書籍を特定できなかったり、特定に困難を生じさせたりする場合があります。そのためにも、出版社名や発行年なども含めた必要最低限の内容を含めなければなりません。具体的にどのような内容を含めるべきかは、後述します。

さらに、これまでの研究に対して、自分の議論がどのような立場にあるのか、はっきりさせるためということもあります。参考文献を明記することにより、自分の考えがどの議論をベースにしていて、さらに、その議論と比べてどこが優れているのか、示すことがで

きます。

3　参考文献の書き方

それでは、具体的にどのような形式で参考文献を記述すればいいのでしょうか。参考文献の書き方に関して、考慮する点が二つあります。一つは、本文中に記載する参考文献のリストと、もう一つは、それを本文中で参照するための方法です。この節では、文献のリストの書き方と本文でそれを参照する時の方法を述べていきます。

なお、自然科学の分野では、参考文献の書き方として、科学技術振興機構 (JST) が編纂した、科学技術情報流通技術基準 (SIST) の「参照文献の書き方」(SIST 02:2007) [*1]という文書があります。人文科学、社会科学での論文においても、基本的な考えはこの文書と同様です。ただ、これらの分野の研究における論文では、アメリカ心理学会のスタイル (以下「APA スタイル」と呼びます。) [*2]や、アメリカ現代言語協会のスタイル (以下「MLA スタイル」) [*3]に従っていることが多いようです。以下、この節では、SIST 02:2007 の考えを基本として、その上で、APA スタイルと MLA スタイルでの書き方を説明していきます。

ただし、専修や学問分野、または、論文の提出先によって参考文献の書き方を明確に指定している場合もあります。その場合は、その形式にしたがって下さい。そのようなものがなくても、学問分野ごとに「よく使われる参考文献の形式」というものが決まっています。自分の分野の先行研究における参考文献の書き方も十分に確認して下さい。ただ、一般的な考え方はどの学問分野でも同様ですので、以下の説明はどのような場合にも参考になると思います。

3.1　文献リストの書き方

まず、文献リストの書き方について、前述の通り、誰が見ても簡単にその文献を特定できる形式にする必要があります。つまり、読者がその文献を図書館なり書店なりで探す時、容易に特定できて、他の文献と混同しないような形にしなければなりません。例え

[*1] SIST 02:2007「参照文献の書き方」`http://sist-jst.jp/pdf/SIST02-2007.pdf` (2009 年 12 月 2 日閲覧)

[*2] `http://linguistics.byu.edu/faculty/henrichsenl/apa/apa01.html` “APA REFERENCE STYLE” (2009 年 12 月 2 日閲覧)

[*3] `http://owl.english.purdue.edu/owl/resource/747/01/` “MLA 2009 Formatting and Style Guide - The OWL at Purdue” (2009 年 12 月 2 日閲覧)

ば、著者名と書名だけだと、どの出版者が出版しているか分からないので、特定に時間がかかってしまうことが考えられます。

ここで「書誌要素」というものを考えます。文献には、重要なものから付随的なものまで、いくつかの情報があります。例えば、著者名や書名などは重要な情報ですが、出版者の所在地や版数などは付随的な情報です。それぞれの情報の単位を書誌要素と呼びます。さらに、この書誌要素は、SIST 02:2007 に従って内容別に分類すると以下のようになります。

1. **著者に関する書誌要素**: 著者名、編者名など
2. **標題に関する書誌要素**: 書名、論文のタイトル、雑誌名など
3. **出版・物理的特徴に関する書誌要素**: 出版者、出版年、雑誌の巻数・号数、ページなど
4. **注記的な書誌情報**: 媒体表示、入手方法、入手日付など

文献リストでは、原則として、この書誌要素を 1、2、3、4 の順番に記載していきます。ここで、上記四つの書誌要素の集まりの間に区切りを入れる際は「.」(ピリオド) を使い、また、各書誌要素の間に区切りを入れる際は「,」(コンマ) を使うのが原則です。ただし、それぞれ区切りを入れない場合もあります。

なお、上記では、出版年は 3 の要素に入っていますが、APA スタイルでは、単純に著者名を記述する代わりに、「著者名 (出版年)」という形で記述します。そのため、3 には、出版年は記載しません。さらに、APA スタイルでは、同じ著者で同じ出版年の文献がある場合、「著者名 (1999a)」「著者名 (1999b)」というように出版年の後に、アルファベットの小文字を付けて区別します。また、括弧を使わずに「著者名, 出版年」というスタイルを使う場合もあります。

文献の種類によって、つまり、雑誌の中の論文であるか、一冊の図書であるか、論文集の中の一つの論文であるか、インターネットのウェブサイトであるか、などによって、記載すべき書誌要素が異なります。以下、それぞれの書き方の雛型と具体例を挙げて、必要に応じて補足説明を行います。雛型は、APA スタイルと MLA スタイルの両方を挙げますが、例は APA スタイルにしています。MLA スタイルを用いる場合は、出版年の位置に注意して適宜置き換えて下さい。

3.1.1 雑誌の中の論文

APA スタイル

著者名 (出版年). 論文名. 雑誌名. 巻数, 号数, はじめのページ-終わりのページ.

MLA スタイル

著者名. 論文名. 雑誌名. 出版年, 巻数, 号数, はじめのページ-終わりのページ.

例:日本語論文の場合

服部四郎 (1976). 「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』 5(6), pp.2-14.

金田一春彦 (1950). 「国語動詞の一分類」『言語研究』, 15, 48-63.

松原茂樹, 加藤芳秀, 江川誠二 (2008). 「英文作成支援ツールとしての用例文検索システム ESCORT」『情報管理』 Vol. 51, No. 4, pp.251-259.

例:英語論文の場合

Landman, Fred(1989a). Groups, I. *Linguistics and Philosophy*, 12(5), 559-605.

Landman, Fred(1989b). Groups, II. *Linguistics and Philosophy*, 12(6), 723-744.

- 著者名は、原則として、「姓」「名」の順番で表記します。したがって、日本語著者名は、そのまま記載しますが、英語著者名は、「姓, 名」とコンマで区切って表記します。
- 上述の通り、APA スタイルの場合、「著者名 (出版年)」と表記します。MLA スタイルの場合、雑誌名と巻号数の間に出版年を入れます。
- 英語の Fred Landman の例では、同じ年の二つの論文を提示しています。この場合、発行順に「1989a」「1989b」としました。
- 複数の著者による共著の場合、基本的にはそれをすべて列記します。ただし、最初の一名だけ表記して、その他の著者名を省略して、日本語の場合は「ほか」、英語の場合は「et al.」と表記することもあります。
- 論文名と雑誌名は区別できるようにしなければなりません。日本語の場合は、論文名を「 」(一重鈎括弧) でくくり、雑誌名を『 』(二重鈎括弧) でくくります。英語の場合は、雑誌名をイタリックにします。MLA スタイルでは論文名を “ ”(二重引用符) でくくるように指定されています。
- 雑誌名の後に、その論文が掲載されている巻数と号数を明記します。Vol. 1, No. 2

のように書く場合と、1(2) のように簡略に書く場合があります。

- 最後に雑誌の中でのページ数を書きます。最初のページと最後のページを「-」(ハイフン) で繋ぎます。最初のページの前に「pp.」と付けることもあります。なお、pp. は ‘page’ の複数形の略記という扱いなので、単一ページの論文の場合、p.100 のように書きます。

3.1.2 一冊の図書

APA スタイル

著者名 (出版年). 書名. 出版者, 総ページ数, (シリーズ名, シリーズ番号), (総ページ数).

MLA スタイル

著者名. 書名. 出版者, 出版年, 総ページ数, (シリーズ名, シリーズ番号), (総ページ数).

例:日本語の場合

金田一京助 (1932). 『国語音韻論』. 東京, 刀江書院.

木下是雄 (1981). 『理科系の作文技術』. 中央公論新社, 中公新書 624, 244p.

例: 英語の場合

Lakoff, George (1986). *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. University of Chicago Press.

Mittelbach, Frank and Goossens, Michel(2004). *The LaTeX Companion*. 2nd ed, Addison-Wesley, Addison-Wesley series on tools and techniques for computer typesetting, 1090p.

- 日本語の場合、一冊の図書のタイトルは『 』(二重鈎括弧) でくくります。英語の場合、タイトルをイタリックにします。
- 書籍の場合、版によって大幅に書き変わっている場合もあるので、版も記載することがあります。
- 出版者の前にその出版者の所在地を入れる場合もあります。大きくて著名な出版者の場合は特に必要はないでしょう。
- シリーズ名やシリーズ番号がある場合はそれも追記します。

- 末尾に総ページ数を書く場合もあります。その際、数字の後に「p」と書きます。

3.1.3 論文集の中の論文

APA スタイル

著者名 (出版年). 論文名. 編者名. 論文集名. 出版者, はじめのページ-終わりのページ.

MLA スタイル

著者名. 論文名. 編者名. 論文集名. 出版者, 出版年, はじめのページ-終わりのページ.

例: 日本語の場合

金田一京助 (1955).「アイヌ語」市河三喜、服部四郎 (編)『世界言語概説』下, 研究社, 727-749.

柴田武 (1976). 「世界の中の日本語」『日本語と国語学』岩波講座 日本語, 第 1 巻. 岩波書店, pp.1-29.

例: 英語の場合

Kiparsky, Paul (1968). Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171-202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

- 論文集の中の論文の場合の書き方は雑誌の中の論文での書き方に準じます。雑誌と同様に、日本語の場合、論文名は「 」(一重鈎括弧) でくくり、論文集名は『 』(二重鈎括弧) でくくります。英語の場合、論文集名はイタリックにします。
- 論文集全体に編者がいる場合もあるので、あれば明記します。

3.1.4 インターネットのウェブサイト

APA スタイル

著者名 (更新年). ウェブサイトの題名. 入手先 (URL), 閲覧日.

MLA スタイル

著者名. ウェブサイトの題名. 更新年. 入手先 (URL), 閲覧日.

例: 日本語の場合

文化庁 (2002)「国語表記の基準 常用漢字表記」, 国語施策情報システム. http://www.bunka.go.jp/kokugo/main.asp?fl=list&id=1000003929&clc=1000000068 (閲覧日: 2009 年 12 月 3 日).

「CaboCha/南 瓜: Yet Another Japanese Dependency Structure Analyzer」. http://www.chasen.org/~taku/software/cabocha/ (閲覧日: 2009 年 12 月 3 日).

例: 英語の場合

Phillips, Macon (2009). President Barack Obama's Inaugural Address. *The White House Blog*. http://www.whitehouse.gov/blog/inaugural-address/ (accessed 2009-12-03).

- インターネットのウェブサイトでも提示の仕方は、書籍や雑誌の場合と大きく変わりませんが、そこにアクセスできる URL (アドレス) と自分がアクセスした日時を必ず明記します。ウェブサイトは頻繁に更新されることもありますし、削除されてしまうこともあります。ですので、自分がそのサイトを閲覧した日時を明記する必要があります。
- ウェブサイトは、その更新年が記されていないことも多いですが、分かる範囲で明記しましょう。上記、文化庁 (2002) の例では、ページ末の著作権表示が 2002 年になっているので、このようにしました。

3.2 参照の仕方

では、この参考文献はどこに書くのでしょうか。

人文科学、社会科学の論文・レポートでは、「ハーバード方式」と呼ばれる形式を利用する場合があります。この方式では、本文末に「参考文献」などといったタイトルの節をたてて、そこに参考文献を列挙します。順番は、著者名の姓のアルファベット順が基本です。同じ著者の文献が複数ある場合は、発行年順に並べます。また、日本語の著者名の文献と英語の著者名の文献が両方ある時は、日本語の著者名の姓をローマ字表記にした場合の順番で並べることが多いですし、また、日本語の文献と英語の文献を別に並べることもあります。

さらに、それを本文中で参照する場合は、著者名と発行年を組み合わせた形で記述し

ます。

具体例を挙げます。

この問題に関して、田中太郎 (2005) は、「〜〜」という見方をしている。それに対して、「〜〜」(鈴木花子 2007:10) という議論も存在する。
また、佐藤 (1999:20) は、「〜〜」と述べている。

参考文献

佐藤一郎 (1999). 『参考文献 1』. 出版者 a.
鈴木花子 (2007). 『参考文献 2』. 出版者 b.
田中太郎 (2005). 『参考文献 3』. 出版者 c.

上記の例のように、著者名と発行年を組み合わせて本文中に記述します。文脈によって、「著者名 (発行年)」もしくは、「(著者名 発行年)」という形式を使います。著者名は姓と名を両方使うこともありますし、姓のみの場合もあります。また、文献の中でのページ数を明記する場合は、発行年の後に「:」(コロン) を入れて「著者名 (発行年:ページ)」とします。

また、注の形式 (脚注、または、巻末注) で、参照する文献を明示する場合もあります。これは、本文の補足説明で使われる注を文献の提示にも使う方法です。具体的には以下のようになります。

この問題に関して、田中太郎は、「〜〜」[1] という見方をしている。それに対して、「〜〜」[2] という議論も存在する。
また、佐藤は、「〜〜」[3] と述べている。

注

1. 田中太郎 (2005). 『参考文献 3』. 出版者 c.
2. 鈴木花子 (2007). 『参考文献 2』. 出版者 b. p.10.
3. 佐藤一郎 (1999). 『参考文献 1』. 出版者 a. p.20.

このように本文での参照箇所に注の形でその参考文献を明示します。通常の補足説明に相当する注も同じように通し番号をつけて表記します。注本体は、ページの下に持ってきたり、章末や巻末に持ってきたりします。論文のような長いものになると、ページ下ではなく、章末や巻末に持ってくることが多いようです。

どちらの形式であっても、どこでどの文献を参照しているのか、はっきりと分かるように書く必要があります。また、逆に言うと、直接参照していない文献は、参考文献として

挙げることはしません。

ちなみに、自然科学の分野では、この方式とは別の「バンクーバー方式」というものが使われています。これは、本文での参照箇所に通し番号を付け、それに対応した参考文献は、参考文献節に通し番号順に並べるというものです。人文科学、社会科学の論文ではあまり使われることはないようです。

3.3 専攻分野毎の注意

前述の通り、専門分野ごとに、参考文献の書き方が決まっている場合があります。それを確認するのためには、その分野の論文を見るのが一番です。特に、スタイルが決まっているような学会誌などでは、執筆要項などで事前にスタイルが明示されている場合があります。以下、そのようなものをいくつか紹介します。ただし、これは、筆者が学会のウェブサイト等で確認できるものをまとめただけのものですので、必ず自分でその分野の論文を確認して下さい。

- 日本英文学会: http://www.elsj.org/(2009 年 12 月 14 日閲覧)
  『英文学研究』投稿規定 (http://www.elsj.org/contribution.html) で、書式上の注意として MLA スタイルに従うように記されています。
- 日本アメリカ文学会: http://wwwsoc.nii.ac.jp/alsj/ (2009 年 12 月 14 日閲覧)
  『アメリカ文学研究』の投稿規定 (http://wwwsoc.nii.ac.jp/alsj/maga.html) で、体裁として、MLA スタイルに従うように記されています。
- 日本独文学会: http://www.jgg.jp/ (2009 年 12 月 14 日閲覧)
  『日本独文学会機関誌執筆要領』(http://www.jgg.jp/modules/organisation/index.php?content_id=54) に参考文献の書き方が記載されています。基本的には MLA スタイルですが、語学論文の場合は、APA スタイルでも可能となっているようです。
- 歴史学研究会: http://www.soc.nii.ac.jp/rekiken/ (2009 年 12 月 14 日閲覧)
  『歴史学研究』の投稿規定 (http://www.soc.nii.ac.jp/rekiken/journal/index.html) に「論文の注について」という文書が掲載されています。この文書によると、参照は注の形式で参考文献は MLA スタイルとなっています。
- 日本心理学会: http://www.psych.or.jp/
  学会の機関誌『心理学研究』の「執筆・投稿の手引き」が http://www.psych.or.

jp/publication/inst.html から閲覧できます。参照はハーバード方式、参考文献は APA スタイルに従っています[*4]。この文書で扱っていない細かい書式も例示していますので、他の分野の論文を書く場合でも参考になると思います。(2009 年 12 月 2 日閲覧)

- 日本言語学会: http://wwwsoc.nii.ac.jp/lsj2/
  学会誌『言語研究』の執筆要項が http://wwwsoc.nii.ac.jp/lsj2/gk/j-gengokenkyu.shtml から閲覧できます。参照はハーバード方式、文献リストは APA スタイルに従っています。
- 日本社会学会: http://www.gakkai.ne.jp/jss/
  機関誌『社会学評論』のスタイルガイドが http://www.gakkai.ne.jp/jss/bulletin/guide.php で閲覧できます。基本的に、参照はハーバード方式、文献リストは APA スタイルに従っています。ただ、参考文献の出版年の書き方が異なっています。APA スタイルでは、出版年を括弧でくくりますが、このスタイルでは括弧でくくりません。
- 日本地理学会: http://www.ajg.or.jp/
  機関誌『地理学評論』の執筆要領が http://www.ajg.or.jp/ajg/cat175/ から閲覧できます。このスタイルは、上記の『社会学評論』と同様に、参考文献の出版年を括弧でくくりません。

4 引用と転載

ここで、簡単に著作権法における「引用」と「転載」の違いについて触れておきます。

基本的に、誰かが書いた文章には、書いたその人にその著作権という権利が発生します。したがって、誰か別の人が書いた文章を、その人の許諾なしで、あたかも自分が書いたもののように使用すると、元の人の権利を侵害したこととなります。これを転載といいます。著作権者の許諾がない限り、他の人の著作を自分のもののように使うことはできません。

ただし、論文やレポートの場合、他の人の著作物を「引用」という形で利用することがあります。これは、著作権法で認められているものです。しかし、引用と認められる条件があります。文化庁のウェブサイトから引用します。

[*4] 「執筆・投稿の手引き」1.6.1 と 1.9。ただし、この文書における参照と文献リストをそれぞれ「引用」「引用文献」と呼んでいます。

（注 5）引用における注意事項

他人の著作物を自分の著作物の中に取り込む場合、すなわち引用を行う場合、一般的には、以下の事項に注意しなければなりません。

1. 他人の著作物を引用する必然性があること。
2. かぎ括弧をつけるなど、自分の著作物と引用部分とが区別されていること。
3. 自分の著作物と引用する著作物との主従関係が明確であること (自分の著作物が主体)。
4. 出所の明示がなされていること。（第 48 条）

(文化庁「著作物が自由に使える場合」`http://www.bunka.go.jp/chosakuken/gaiyou/chosakubutsu_jiyu.html` 閲覧日: 2009 年 12 月 3 日)

これによると、まず、引用する必然性がなければなりません。研究の場合、他の人の著作を持ってきて、それを元にして議論する場合は、十分、必然性があるとされています。また、引用部分は鈎括弧でくくったり、上記のように段落を変えて分かるようにする必要があります。そして、その引用部分の直後には、どこから引用しているのか、明示しなければなりません。さらに、いくら引用が明示されていても、自分の文章よりも引用の方が多いような状態だと引用とは認められません。引用は、必要最低限の量でなければなりません。

参考文献と引用は密接な関係にあります。くれぐれも著作権に注意して引用を行って下さい。